

平成30（2018）年度
事業計画書

自 平成30（2018）年 4月 1日
至 平成31（2019）年 3月31日



公益財団法人 日本盲導犬協会

1. 盲導犬育成事業

本年度(2018年度)は、2020年までの3か年を「新時代への飛躍に向けた新基盤形成(構築)期間」と位置づけ、「より良質な盲導犬を如何に早く、より多く育成するか」をテーマとした事業計画・主要施策を計画する。その中で引き続き、訓練・育成事業の共通項目として、盲導犬育成の各工程(繁殖・出産～PW～ケンネル・医療及び研究～盲導犬訓練～共同訓練～アフターケアの一連したプロセス)における標準化と技術向上によるQCD(クオリティー・コスト・デリバリー)の更なる向上を目指し、年間盲導犬育成頭数は50頭以上、年間Q犬育成頭数は55頭以上とする。引き続き、継続的に年間50ユニットの安定的育成、かつユーザーに安心して盲導犬と生活し、安全に歩いてもらえる基盤を強化する。

(1) 視覚障害者に対する歩行指導及び盲導犬貸与

本年度の盲導犬育成目標を51ユニットとし、視覚障害者へ盲導犬を貸与する。

(2) 盲導犬の認定

①当協会の正規の使用者証である「認定証」②海外からの旅行者に3ヵ月を限度とする「期間限定認定証」の発行を実施し、適正に盲導犬を認定する。

(3) 犬の飼育及び訓練

①候補犬の訓練

本年度新たに候補犬120頭を訓練する。共同訓練に供するまでに、TP(Task Performance)1、TP2、TPQの3段階のテストを行い、盲導犬として認定できるレベルになったQ犬を55頭以上作出する。各訓練センター間で訓練課題の進捗に応じ、訓練士による相互評価や訓練犬移動などを適宜行い、協会全体の訓練効率を向上していく。

②繁殖

計画的な繁殖・出産・譲渡により、120頭以上を目標とした子犬を安定確保する。また繁殖犬の安定飼養頭数に取組むと共に出産適齢を管理する。元気な子犬の出産と発育、安全で安心な産前産後をはかるために、繁殖犬・幼犬の飼育指導改善、健康理由・稟性理由によるCC犬の減少、ユーザーとの組み合わせに適したタイプの犬を出産させる管理のもと、ターゲット的中率・育種価の向上等交配計画改善に重点を置く。

③パピーウォーキング委託

120頭の子犬をパピーウォーカー(PW)に委託する。

パピー飼育期間に、パピーの早期社会化、早期学習、早期評価検証データの蓄積等の取り組みを更に改善し、PWの理解と協力を得て早期課題解決に取り組む。

また、対象パピー犬に対する評価や観察力を向上する為の環境整備を継続する。

④島根あさひ盲導犬パピープログラム

盲導犬パピープログラム10年目となる。昨年度と同じく対象犬6頭を実施する。

⑤引退犬飼育

本年度内に予定される盲導犬の引退は16頭である。富士ハーネス引退犬棟及び引退犬飼育ボランティアと連携し、引退犬のQOL向上に努める。

⑥犬舎・医療管理

引き続き、訓練犬の健康・健全状態を維持するため、ケネル業務の質の向上と効率化を図る。獣医師の指導に基づき、疾患の早期発見、発病件数の軽減をすすめ、盲導犬育成訓練成功率の向上を支える。加えて大学獣医科病院・専門医における医療協力体制の拡充や緊急医療体制も更に強化する。

(4) 盲導犬ユーザーに対するフォローアップ (FU)

①定期FU、②問題解決FU、③その他に分類されるFUのうち、特に共同訓練直後～1年以内のアフターケア期間の充実をはかる。盲導犬ユーザーの犬使用技術および管理意識をより定着させ、問題の発生を未然に防ぎ安全確保を強化する。

貸与後1年以内のユーザーを対象に宿泊型FUとして拠点毎に盲導犬新ユニット出発式を実施する。通年では盲導犬歩行状況等情報に基づき、歩行安全性確保のために各訓練センターあるいは現地での問題解決FUを行う。加えて犬年齢6歳時を対象に集中型のFUを定着させる。

(5) 盲導犬訓練技術の向上

盲導犬訓練工程の課題は、訓練技術強化、訓練期間の短縮と成功率の向上である。盲導犬訓練士、盲導犬歩行指導員の基礎訓練・共同訓練技術の向上をはかるため、技術評価、スキルマップの活用による計画的OJT、集合研修を行う。

また共同訓練工程は、Q犬のカスタマイズによりマッチング適正率をより向上させる。加えて、盲導犬歩行に関する実務的な研究を行い、新たな技術・手法等の習得や研究発表大会を開催し、訓練士間での共有を図る。歩行支援技術の研究にも取り組み、安心安全歩行に繋がる補助具開発を継続する。

(6) 各種研修会への参加

協会内教育や各種研修会等への参加、自己研さんや自主研究を奨励する。

(7) 犬舎・施設改修整備

神奈川訓練センターに本格的なドッグラン施設をつくる。

富士ハーネスの引退犬棟ドッグラン施設の改修をする。

犬舎狭隘対応および新たな育成方針に基づく新犬舎建設および増築の検討に着手する。

2. 盲導犬歩行指導員等育成事業

(1) 盲導犬訓練士 (GDT) の養成を計画実施する。

- 3年目（准訓練士）2名。1年目研修生4名対象。
GDT 2名を推薦。
- (2) 盲導犬歩行指導員（GDI）の養成
盲導犬訓練士有資格者（歩行指導員研修生）に対して、連合会主催の盲導犬歩行指導員資格試験の受験を推薦できる指導技術レベルに達するように計画的に指導する。
GDI 1名を推薦。
- (3) 盲導犬歩行指導力のレベルアップ
白杖歩行指導員養成のプログラムを計画実施し、盲導犬使用者に対する指導力のレベルアップをはかる。

3. 調査研究事業

- (1) 盲導犬の人工繁殖・育種技術の導入研究の継続
- ①凍結精液作製・人工受精による繁殖法の技術定着
 - ②家系図に基づく疾病・適正因子等との関連と選抜方法の調査
 - ③血統情報に基づく繁殖犬の選抜方法の確立
- (2) その他研究協力
引き続き、大学研究者が行う「動物行動学と盲導犬適性の関連性」、「遺伝子解明と犬種共通疾患調査」等の研究テーマに協力する。

4. ユーザーサポート事業

- (1) 盲導犬歩行についての理解促進とリハビリテーション相談
視覚障害者への盲導犬歩行についての理解促進をはかり、視覚障害者の移動に関するリハビリテーション相談及び説明会等を実施する。また、盲導犬希望者に対して“事前訓練”など共同訓練に向けた準備を適宜サポートしていく。
- | | |
|----------|-----|
| 盲導犬体験歩行会 | 71回 |
| 盲導犬説明会 | 35回 |
- (2) ユーザーコミュニケーション
盲導犬ユーザーの満足度向上のため、以下の事を実施する。
- ①盲導犬ユーザーとのきめ細やかなコミュニケーションをはかる。犬の年齢に応じた情報提供や各種相談に応じる。
 - ②盲導犬ユーザーからの聞き取りにより、盲導犬歩行状況や健康・生活状況を把握し、盲導犬歩行上の課題の早期発見につとめ、訓練部によるFU実施につなげる。
 - ③盲導犬6歳時コミュニケーション会の実施。各訓練センターに6歳の盲導犬を使用する盲導犬ユーザーを集め、必要なFU、犬の健康診断と飼育アドバイスを行う。

- (3) 視覚障害者在宅生活訓練（白杖歩行訓練等）
610コマ以内の在宅訓練を実施する。
- (4) 視覚障害リハビリテーション相談
盲導犬希望者、盲導犬ユーザー、短期リハ希望者、歩行訓練希望者、その他視覚障害者の相談に応じる。
- (5) 短期リハビリテーション
9回開催する。訓練センター外での現地短期リハビリテーションや中学生を対象とした学生短期リハビリテーションを開催する。
- (6) 視覚障害児キャンプ
スマイルワン仙台で開催する。将来の盲導犬ユーザーを育て、視覚障害児のQOLの向上に貢献する。
- (7) 各種研修会への参加
 - ①各種学会等への研究発表を促進し、職員を派遣する。
 - ②協会内研修会を開催し、リハビリテーション技術の向上をはかる。
- (8) 生活講習会の開催
iPhone、iPadをはじめ、視覚障害者の生活のニーズに沿った講習会を開催する。センター近県の関係団体の要望に応じ、講習会を開催する。
- (9) パートナーズを年4回発行する

5. 普及啓発事業

創立51年目からの普及啓発事業は、盲導犬を知ってもらう普及事業から視覚障害と盲導犬について正しい理解を得て、盲導犬の受け入れ拒否のない社会づくりを目指した啓発活動により重点をおいて推進する。

視覚障害者が盲導犬と共に行きたい時に行きたい場所に行くことができる、受入拒否の無い、事故を未然に防ぐことができる、視覚障害者をあたたかい目で支える社会をつくる一翼を担っていく。そして、支援者との笑顔のコミュニケーションを大切にし、「Heart to Heart」の精神で普及啓発活動に取り組む。

- (1) センター内啓発活動
各訓練センターでは、多くの市民・団体の方々に盲導犬デモンストレーションや、盲導犬ユーザーの講話を提供する。視覚障害者の介添方法などの体験学習を通し

て、視覚障害者が社会参加しやすい社会を醸成していく。

① 富士ハーネス

個人・団体の見学者を受入れ、盲導犬デモンストレーションやふれあいを通して、盲導犬と視覚障害への理解を促進する。

② その他のセンター

定期的な見学会を実施。盲導犬ユーザーの講話や、盲導犬体験歩行をすることで、盲導犬と視覚障害に対する理解促進をはかる。また、学校・団体からの依頼に対し見学会を行い福祉教育の一翼を担う。

(2) センター外啓発活動

多くの市民が集うさまざまな場所へ盲導犬の受入れ促進、盲導犬と視覚障害への理解につなげるため積極的に訪問する。盲導犬体験歩行やふれあい活動を実施し、多くの情報を発信する。

① 小中学校キャラバン

全国の小中学校への訪問活動を積極的に実施。次世代を担う児童・生徒達に盲導犬と視覚障害の正しい情報・知識を提供する。

② 盲導犬受入れセミナー

小売店・飲食店・宿泊・医療機関・交通事業者向けに実施し、視覚障害者を取り巻く社会環境整備と受入れが当たり前となる地域づくりを目指し、理解を深める。

③ ふれあい広場

大型商業施設の協力を得て、盲導犬とのふれあい活動や盲導犬デモンストレーションを実施し、多くの方々への理解を促進する。

④ 団体での啓発活動

盲導犬ユーザー・ボランティアと街頭に立ち、啓発活動を展開する。通行する方々へメッセージを発信し、盲導犬事業への理解に努める。

⑤ 首長訪問

盲導犬ユーザー在住地域の首長訪問を行い、住みやすい街造りの協力を依頼する。また、報道機関の協力を得て、多くの市民に情報発信する。

⑥ 動物介在活動 (A A A)・動物介在療法 (A A T)

全国の病院・福祉施設等への訪問を実施。犬とのふれあいを通じて、入院患者、入所者への動物介在活動を行う。また医療機関での動物介在療法に協力、発展に貢献する。

⑦ アドボカシー活動

盲導犬ユーザーから「受け入れ拒否があった」「当事者では解決できない」という訴えに対し、問題解決のお手伝いを積極的に行う。

⑧ その他

第26回盲導犬育成チャリティゴルフ大会を開催

開催日 9月4日(火) 会場 厚木国際カントリー倶楽部

(3) 広報

① 広報活動

協会の活動を積極的に発信していくとともに、企画提案型の広報を展開する。

② 会報誌「盲導犬くらぶ」の発行・発送

年4回各5万部の会報誌「盲導犬くらぶ」を発刊する。

一部記事をHPでも公開し、より多くの人に正しい盲導犬の理解を求める。

③ 刊行物の企画・管理

「盲導犬と歩く・ユーザーは語る」ダイジェスト版を作成する。

④ ホームページ・電子コンテンツ運営

SNSによる情報発信力を強化する。

⑤ 情報管理

情報管理を徹底しリスク管理を強化する。

6. 関係団体協力事業

- (1) 日本盲導犬協会ユーザーの会、ボランティア委員会との協力・連携を深め、協会事業の発展と事業の質を向上させる。
- (2) 全国盲導犬施設連合会、全日本盲導犬使用者の会、アジア・ガイドドッグ・ブリーディング・ネットワーク（AGBN）など盲導犬育成関連団体との関係強化と相互発展をはかる。
- (3) 日本盲人社会福祉施設協議会、日本盲人会連合、日本盲人福祉委員会、視覚障害リハビリテーション協会、日本身体障害者補助犬学会と連携し、県市社会福祉協議会、介助犬育成団体、聴導犬育成団体等、視覚障害関係団体および補助犬関係団体と協力し、福祉事業としての一層の充実と発展をはかる。
- (4) 国際的な協力関係
国際盲導犬連盟（IGDF）に理事およびアセッサーを派遣し貢献する。各種交流を通して国際的な協力関係を強化する。
9月にオーストラリアで開催されるIGDFセミナーに協会役員および職員を派遣する。

7. その他

- (1) 創立50周年で発表した井上ビジョンに基づき次の事業を行う。
 - ① 盲導犬コミュニティハウス（仮称）建設の調査
 - ② ビジョンに基づく多角的研究企画の調査
 - ③ 新たな安全歩行補助デバイスの開発

(2) 人材育成

- ①自由研究・調査、自己啓発、QCサークル活動を積極的に応援し、12月に協会内の研究発表大会を開催する。さらに、協会内発表を経て、各種学会やセミナー等へ積極的に発表する。
- ②福祉職員のための研修会や同行援護従事者研修に職員を派遣し、視覚障害福祉に必要な知識と技術を習得させる。

(3) 東日本大震災支援

被災地域にあるスマイルワン仙台において、震災被災者への各種講習会や必要な更生相談、リハビリテーション支援を行う。

(4) 協会ICTインフラの活用

現在稼働中の仮想デスクトップ環境および各種クラウドサービスを導入し、きめ細かい快適なICT環境を提供し、業務効率の向上に尽力する。

(5) 事業継続計画 (Business Continuity Plan)

作成したBCPに基づき、各種備品の整備およびBCP訓練を実施する。